

いもち病

いもち病はイネの生育段階ほぼすべてにおいて感染、発病する。発病部位や生育段階により「苗いもち」、「葉いもち」、「穂いもち」、「籾いもち」等の名称になる。ここでは、防除上最も重要となる「葉いもち」と「穂いもち」について説明する。

1 病徴

(1) 葉いもち

葉身に発病する。病斑は最初は小さな褐点であるが、進展すると紡錘状となり周縁は褐色、中央部は灰色となる（写真1）。被害がひどくなると葉身が枯死し「ずりこみ」と称される症状（写真2）を呈する。



写真1 葉いもち病斑



写真2 葉いもち ずりこみほ場

(2) 穂いもち

穂首、みご、枝梗、護穎等に発病する。発病部位に褐色、次いで灰白色の病斑ができ（写真3 穂首いもち）、穂首いもちの場合は穂の部分对白変、登熟とともに赤っぽい褐色（写真4）となる。



写真3 穂いもち 穂首に発病



写真4 穂いもち 発病ほ場

2 発生のようす

(1) 葉いもち

ア 感染源

いもち病菌は、主にほ場内のわら、籾等のイネ残渣を寄主として越冬する。またいもち病に感染した種もみも感染源となる。ほ場内での発病は、補植用の「置苗」から確認される場合が多く（写真5）、周辺株への感染源となる。

イ ほ場内での感染と発病

発病からおおよそ5日間で孢子（写真6）が形成、飛散により感染する。孢子の飛散といもち病の感染には気象条件が関係し、多湿条件が続きかつ気温 25℃前後が最も感染しやすい。このときの孢子の飛散範囲は数百メートルから1 kmにも及び発病が広範囲となる。このときの発生を「全般発生」と呼び、発生量は少ないが地域内にある多くのほ場で病斑が認められる。この時期は「全般発生開始期」とされ、以後数世代を経て被害が急拡大し、イネ上位葉へ発病して穂いもちへの感染源となる。

福島県の全般発生開始期はおおよそ7月上旬から中旬であったが、近年は残効性の長い育苗箱施用剤が普及したため、全般発生開始期の特定が難しく、7月下旬の発生量も少なくなった。しかし冷害や殺菌剤耐性菌の出現により多発が懸念され、依然として注意を要する病害である。



写真5 置苗の苗いもち



写真6 いもち病菌（孢子）

(2) 穂いもち

穂の近くの葉いもちが主な感染源となるが、一見葉いもちが認められなくても穂いもちが発生する場合がある。多湿条件で感染しやすい。感染と発病は出穂直後から始まり、病斑から先の穂の登熟を阻害する。

穂いもちの感受性は出穂直後が最も高く、以後低下する。収量への影響は、穂いもちへの感染時期が、出穂始めからの日平均気温の積算温度で 100℃以内（出穂始めから4～5日以内）の場合大きく減収するが、積算温度が 350℃（平均気温 25℃で 14日、20℃で 18日）を超えると収量に及ぼす影響は小さい。

3 防除

発生前の防除が原則で、葉いもちは育苗箱施用剤または本田施用剤、穂いもちも本田施用剤により実施する。薬剤名及び施用時期については「福島県農作物病害虫防除指針」及び当ホームページ「水稻の病害虫防除対策」を参照してください。